

Title	モルゲンシュテルン著 経済政策の限界 : Oskar Morgenstern; Die Grenzender Wirtschaftspolitik, 136 S. Wien 1934
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.2 (1935. 2) ,p.313(149)- 318(154)
JaLC DOI	10.14991/001.19350201-0149
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350201-0149">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350201-0149</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

結語として著者は云ふ、「要するに維新の當初に於いて全く一文無しの財政に處するに一時權宜の措置に出たことは誠に事情已むを得ない事柄であつて、基金の調達と云ひ金札の趣旨性質の一變といひ舊貨幣の吹増と云ひ一面にその弊を伴つたことは争へないが、兎も角もこの三者を按排して曲りなりにも財政の危機を支へ能く新政の實を完うせしめた所以は當時如何に政府の苦衷の存したかを十分観察せねばならぬ。妄りにその弊のみを擧げて評價し去るべきものではなからう。殊に政府が金札並贋惡貨の失策に苦き經驗を嘗めたことは、頓がて明治幣制の確立を促進せしめ、一日も早く會計の基礎を鞏固ならしむるの必要を痛感せしめた所以であつて吾人の最も注意すべき點である。尙ほその顛末に就いては更に編を新にして述べて見たいと思ふ」と。斯くて吾々は吾々の手にし得ざる資料に基づく本書第二編、第三編の續刊を希求せざるを得ない。

本書の持つ價值が、何よりも先づ明治初年財政史資料たる點に存するとは、本書を繕く誰人も一樣に考へ及ぶところであらう。その意味に於いても本書續編の刊行によつて、吾々の従來有した資料の補整領域の擴大することは、この分野の研究に努める者のみにでなく一般にとつても多大の喜びとしなければならぬ。しかも亦經濟史家の進路が、斯くの如きの確なる資料の提示と共にその解釋にも亦存することを想到する時、吾々の前途の愈々廣く且つ遠きことを痛感せざるを得ないのである。

追記——上記の如く、著者自らその意志あることを表明され、評者またその實現の日の近きことを希つた本書續編の刊行は、少くとも著者自らの手に成る形態では、遂に公けにされ得なくなつたことを、ここに一言して置かねばならない。

本年初頭、著者澤田教授は、本書が市場に出てから一ヶ月ならずして、幽明界を異にされたのである。評者は謹んで哀悼の意を表すると共に、故教授の企圖の後継者の出現を期待して止まぬ者である。——(校正の日に)。

### モルゲンシュテルン著「經濟政策の限界」

—— Oskar Morgenstern; Die Grenzen der Wirtschaftspolitik,

136 S. Wien 1934 ——

氣 賀 健 三

本書は「經濟政策の限界」と名附けられて居るが、其説く所の内容よりして其意味を察するに、著者の素志は經濟理論と經濟政策との關係を明にすることに在ると言つてよいであらう。即ち理論經濟學は、應用經濟學とも稱すべき經濟政策に對して如何なる立場に在るものであるか。經濟政策的主張なり判斷なりは直接に理論から演繹されるものであるか何うか。抽象的理論と具體的現實との間の差違は、經濟原理と經濟政策との間の關係に取つては如何に考慮さるべきであるか。之がモルゲンシュテルンの提出せる主要な問題である。

之に對する解答は次の如くである。即ち理論經濟學なるものは其命題の如何なる應用に際しても、全然中立的態度を保持すべく、如何なる經濟政策的要求に對しても依存關係に落入つてはならぬ。又實際上の現象は因果關係が複雑を極めて居つて判斷の據所に迷ふことの頗る多いものであるが、之を確める爲にする因果的説明は飽くまで理論經濟學の追求する所に俟たねばならぬ。如何なる政策的主張と雖ども苟も合理的基礎を得んと欲するならば、理論經濟學を無視しては満足するを得ない。此點に理論は政策の限界を劃するものであるといふのがモ氏の大體の論

旨である。

筆者は曩に本誌先月號に於てヘランダーの一著「經濟政策の合理的基礎」なる書物を紹介した。同書の取扱へる所は本著と異り、經濟政策そのもの、理論的基礎如何であつた。換言すれば經濟政策が一個の學問として成立する爲には之に體系的統一を與へる或價値が豫め存し、此價値に關係せしめて政策的判断を下すことが必要であるが、經濟政策學に於ける此價値、此統一的原理は何であるかといふことがヘランダーの書物の主要問題であつた。謂はゞ經濟政策學の最も根本的なる問題が取扱はれたのである。

然るにモルゲンシュテルンの此著は之より一步下つて、經濟政策の斯る基礎を疑はず、既に成立せるものと考へ唯、其限界を知らんと欲したものである。即ちモルゲンシュテルンは經濟政策上の主張が理論其物からは演繹されないが、又一面に於て合理的ならんとする限り理論を全く無視して之を唱導し得ぬものであることを説かんとしたのである。従つて此際、政策的主張を指導する目的、又は政策的判断の基準、又は政策的努力の目標ともいふべき政策の根本的指導觀念に就ては充分なる検討を行つて居らぬ様である。

略言すればヘランダーの著書は經濟政策の合理的基礎を説き、モルゲンシュテルンの著書は其合理的限界を明にせんとしたものと云ふことが出来る。以下に於て簡単に其内容を紹介する。

全篇は十章に分たれる。其第一章は序論である。先ず最初に經濟政策を定義して次の如く述べる「經濟政策とは、行爲者の經濟的利害を超越し、若しくは之と全く無關係に或多數の經濟者又は企業家に利益(稀に損失)を齎らすことを目的とする一切の行爲及び手段の全體より成るものであつて其行爲の動機は専ら斯る共同社會的影響に存するものでなければならぬ」と。此定義は頗る漠然として居り、嚴密に検査するならば幾多の疑問を残すものであるが、

モルゲンシュテルンの議論は其方向に注がれず、斯る漠然たる常識定義に満足して居る觀がある。彼は寧ろ既に之を與へられたものと爲し、此目的より出でたる諸手段實施の結果を目的に照して検討することが重要であると考へる。所で此結果検討の爲には單なる個々の事實や個々の政策的經驗を知ることには満足しないで、事實の孤立化、抽象化の方法に依つて論理的に統一した一定の理論知識を獲得する必要がある。然るに斯様に孤立化、抽象化された理論的知識は常に必ず現實に其儘適用することが出来ぬ。兩者の間には常に間隙がある。理論を如何にして實地に適用すべきやといふことが今度は頗る重大な問題と爲つて来る。然も最も抽象的なる理論は當然吾人の出發點であるが、畢竟するに吾人の經驗より得られたる結果の綜合に外ならぬものであり、決して先天的に與へられたる要請ではない。理論は常に改變せられ、絶えず進歩し決して完成せられるものでない。従つて理論其物から直接に適用の原理を知らんとすることは愚者の業である。(以上第二章)

第三章は「確固不動の政策體系」といふ題であるが、斯る政策體系の存在を否定せるもので、其論を進むるに當つて自由主義と社會主義の兩思想を擧げ之を論難して居る。兩者共に經濟理論より誤つて政策思潮として直接に演繹せられたものである。抑、理論を實地に適用するに當つては吾人は、一、理論其自體の發展、二、其經濟其自體の發展、三、政策目的の變化(及經濟感情の變化)を考慮せねばならぬのであつて、確固不動の經濟政策體系などは全く存在し得ぬのである。經濟政策の問題は此に在るのでなく寧ろ、a 個々の手段に取つて客觀的の指導觀念ありや、b、或は個々の手段の間に唯、單にそれ等相互に聯絡する作用關係のみありやといふことに在る。

此問題は一章置いて、第五章に於て答へられる。其解答は吾人の最も興味を惹く所であり又此書を中心點の一つをも爲すものであらう。

モルゲンシュテルンは次の如く之を問ひ直す。即ち今經濟政策の確固不動の體系が否定せられたる場合に、吾人の研究は「經濟政策上の諸方策は一個の有意義なる全體を爲すものであるか否か」といふことに向ふと。此疑問の意味を二分して彼は、一、經濟政策上の諸方策間に一つの意義的關係ありや、又は二、作用的關係ありやと爲す。

意義的關係が在るか否かといふことは、諸方策を一點に統一すべき或根本的要請が確立せられ得るか否かといふことであるが、モルゲンシュテルンは此要請とは「社會的に最善のもの」「社會的に價值最高のもの」の明確な表象を得らるゝや否やに係ると答へる。而して此問題は價值の世界、目的設定の領域に屬し、決して經濟理論其物から演繹し得ざるものである。且つ又、「經濟的現象は變動常無く、而して經濟政策の任務は、縱令如何なる種類の價值標準が確立せられやうとも、此變動状態を通じてのみ構成されるものである。經驗的事象の多様性は頗る廣く、全體の一般的な詳細の方針を樹立するを許さぬものがある……」。

是に於て第一問に對するモルゲンシュテルンの解答は下の如く要約される。即ち經濟政策的目的設定の可能性は全く否定されるのではないとしても、經濟理論から之を引出すことは許されず、且つ決して先驗的性質のものであつてはならぬ。然かも既に存するか又は可能なる一切の具體的方策の全體を包含するものでなければならぬ。従つて「意義的關係」といふことは「社會的最善のもの」が經驗的現實的に確定不可能であるといふ理由に依り却下せられる。入れ代つて第二の關係が取上げられる。

之を肯定し、此に經濟理論の意義を認め、經濟政策の限界を指摘せんとするのがモルゲンシュテルンの目的である。今、經驗的現實の多様性は經濟政策上の諸方策間に有意義なる統一を許さぬとすれば、此等諸方策は相互間何等

の聯絡なく、雜然と勝手に經濟政策と呼ばれて居るのであらうか、何等かの方面に於て之を統一する原則を與へられて居らぬのであらうかといふ至極當然な疑問が生ずる。モルゲンシュテルンは此處に一切の經濟政策的手段の實際上の相互依存關係の存在を指摘する。此依存關係は諸手段の作用が總て必ず價格關係の上に現れる點に之を見ることが出来る。如何なる政策上の手段と雖もそれが何等かの作用を備へて居る限り必ず其作用は價格變動として現れる。モルゲンシュテルンは此依存關係を指して「經濟政策の實際的融合の原則」と名付けて居る。而して斯くの如き事實は反面に於て嚴格なる不動の體系の存在や、統一化の意味に於ける個々の手段の有意義的調和の成立を否定するものであつて、經濟政策に於ては飽くまで此作用的關係のみが其統一化の基準と爲らねばならぬとされるのである。

此に於て經濟政策に於ては其作用が相互間に於て調和すること、矛盾せざることが要求せられる。經濟政策が實際に矛盾なきを得るや否やは、此點に於て理論經濟學に依つて之を批判し得る。此批判は經濟政策に取つて頗る重要であり依つて以てより以上の發展、進路を與へらるゝ基礎ともなるものであり、又此方面こそは理論經濟學が役立つ最も重要な一面と考へられる。而して理論經濟學は斯種の批判を下すに當り決して或價值の世界に入込むものでなく、あらゆる目的設定に對して飽くまで絶対不變の中立を守るものである。

モルゲンシュテルンは此に經濟政策の限界を劃する理論經濟學の意義を説き之を強調することを努めてやまぬ。彼は此機會に英國古典學派やマルクイズムが自由主義的政策又は社會主義の要求をば其經濟理論導き出すことの誤を指摘して居る。

之を大體同様趣旨の議論をばモルゲンシュテルンは「經濟學の危険」と題する第九章に於て取扱つて居る。理論

と政策とを嚴重に區別すべき必要があるのに俗流の經濟學は屢、兩者を混同することを反覆して説明したに過ぎぬ。以上を以て此書物の全部ではないとしても原著者が其書中に説かんと欲した要旨は之を説明し得たと信ずる。其説く所は必しも新奇でなく獨創的とは受取れぬが、在來一般に行はれて居る見解をば體系的に纏めて一家の風を作して一般讀者に之を提供せる上に於て、經濟政策の基礎理論を研究せんとする者に取つては兎に角一應參考に供する價値ある良書であると思ふ。

(一九三五・一・三稿)

# 前號 (第二十九卷) 目次

- トーマス・ロバート・マルサスと彼れの所謂「經濟學上の新學派」 高橋誠一郎
- 婚姻に於ける『生物學的』と『社會學的』 打村 鑛三
- ヘランダ著「經濟政策の合理的基礎」  
— Sven Helander: Rationale Grudlage der Wirtschaftspolitik, 1933, Nürnberg — 氣賀 健三
- 波多野鼎著「景氣論」 小高 泰雄
- 「新國際主義」を讀む  
— Clark Foreman, The New Internationalism. North & Co. New York 1934 — 加田 哲二
- 野間繁著「無産者救護制度體系」 小島 榮次
- ハミルトン教授の西班牙に於ける價格革命 高村 象平
- マルサス人口論及び經濟學說關係 文獻 加田 哲二

● 一冊定價金五拾錢 郵税金壹錢五厘  
● 一ヶ年分金貳圓九拾錢 郵 稅 共  
● 一ヶ年分金五圓四拾錢

● 編輯及び事務に關する一切の用件は發行所宛  
● 營業に關する用件は發賣元宛  
● 原稿締切期日は發行の前月十日限

昭和十年一月卅一日印刷納本 昭和十年二月一日發行 每月一回一日發行

三田學會雜誌 禁轉載  
編輯者 東京市芝區三田二丁目二番地慶應義塾内 江 田 範 保  
發行所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 金子 鐵 五 郎  
印刷所 東京市赤坂區新町五丁目四十二番地 金子 沂 版 所

發賣元 東京市芝區三田貳丁目壹番地 丸善株式會社三田出張所  
電話三田一九二六番  
尚ほ本誌は全國各市雜誌店にて販賣す

發行所 東京芝三田 慶應義塾内 理財學會